



札幌市内にすむ人馴れた都市ギツネ。視線の先には自転車の持ち主である小学生らがいる

多様な価値観を浮き彫りにする 都市ギツネ問題



池田 貴子

北海道大学 CoSTEP / 「野生物と社会」学会 理事

北海道のギツネには、ファンとアンチの両方が存在する。見ての通りの美しさなのでカメラ片手に日参する人も多いが、それを上回る声の大きさと苦情があがる。一番の理由はギツネが寄生虫エキノコックスを媒介するためだが、加えて人を恐れず街を歩き回る野生動物の存在そのものに得体の知れなさを感じるらしい。

面白いのは、寄せられるのは苦情だけではないことだ。例えば今年の春、こんな「報告」を受けた。昨日ギツネに財布をとられてしまった。マイナンバーカードも免許証も入っていたがエキノコックスが怖くて巣に近づけない、と。それはさぞや怒り心頭だろうと思ったら、子育て中の巣を荒らすのは「悪い」から諦めます、というのだ。そこは私の調査地だったので、あのイタズラっ狐(怒)とすっ飛んで行ったのだが、残念ながら財布を見つけておくことはできなかった。おおらかな被害者には感謝しきりだが、それにしてもギツネというのは、人間にかくも多様な感情を抱かせる生き物らしい。そういえば、エキノコックス対策やギツネ避けの相談はくるものの、直接的にも間接的にも「駆除してほしい」とは言われたことがない。生物多様性重視の世論を忖度してなのか、そこまでじゃない感覚なのかはわからない。が、このリスク認識の多様性がギツネ対策を複雑にしているのは間違いない。

ギツネと人との軋轢はすでに小さくはないが、両者の溝が決定的なものになってしまいう前に……と、人間側の餌付け問題の解決をめざす、今日この頃である。